

認知症の人を対象にした作業療法実践事例
作業療法事例(グッドプラクティス:GP)

シート例②

老健(在宅復帰)		夫に対する暴力・暴言で介護疲弊が強く一時的な入所を経て、在宅復帰ができた事例	
老健入所事例	年齢:70歳代 性別:女性 疾患名:レビー小体型認知症	介護度 要介護2	
	【介入までの経緯】3年前より物忘れが見られ受診、上記診断となり、アリセプト開始。昨年頃より「自宅に知らない人がいる」「殺される」と警察に連絡したり、自宅周辺を走り回ったりする。夫の退職後、症状が更に悪化、夫への暴言、暴力見られ、A病院に入院。興奮、粗暴行為、他者とのトラブルで拘束することもあった。徐々に落ち着くも、物取られ妄想、焦燥感など状態変化あり。外泊を何度か重ねた後、自宅退院。夫という時間が続くともた夫への暴力がひどくなるため、老健に入所となる。HDS-R 14点 DBD:18点 Zarit:19点 【本人・家族の生活の目標】落ち着いて過ごすことができれば、また自宅へ連れて帰りたい(本人:家に連れて帰ってください)		
	開始時(入所時)	中間(1ヶ月後)	在宅復帰(3ヶ月半後)
ADL・IADLの状態	○動作的にはほぼ自立も遂行機能障害のため、見守り・声かけが必要。(拒否もあり) ○トイレの場所がわからないことで更に混乱	○食事前のテーブル準備など行う(自分からやりましょうかと職員に声をかける場面あり) ○トイレ・自室などは覚えている	○夫への暴力・暴言ほぼ消失。家事など自宅での役割は概ね夫だが、本人の参加も徐々に増える。 ○夫から「このままなら家で暮らせそうです」と発言
BPSD/周囲との関係性	○帰宅願望と妄想が著明。そのことで、周囲とのトラブルが多い	○気の合う人たちの中では、少しずつ一緒に過ごす時間が増えている	【考察】本人のADL・IADL著変ないが、トイレの場所や自室を覚え、水やりやカーテン開閉などの役割を持つことで、落ち着いて過ごす時間が増えた。退所後は、ショートを定期的にご利用しながら在宅生活が継続できており、当施設が本人に居場所として記憶され、ショート時も混乱なく、来所している。夫には、自宅で料理や洗濯などすべてに手を出さず、見守りながらご本人にできることは行ってもらうよう伝えたことや、本人に対する症状理解から、夫が精神的に余裕をもって接することができるようになり、介護負担感の軽減につながったと考えられる。
生活行為の目標	○日課となる役割を見つける ○着替え・整容などに関心が持てる	○夫の協力のもと洗濯物の準備ができる ○声かけで着替え・整容が自身で行える	
介入内容	①トマトの手入れ・水やりを日課とする ②朝晩のカーテン開閉、ベッド周囲の環境整備を役割とする ③落ち着いて過ごせる場所を見つける ④夫との関係性の再構築(妻に対する症状理解を深める)	○夫が来所時に一緒に過ごす時間を仲介する(いつも避ける行動が見られるため) ○夫に妻の混乱の起因がどこにあるか一緒に考える(家族カンファレンス) ○自宅できそうなことに繋がる簡単な家事(タオルたたみ、テーブル拭きなど)	

トマトの手入れ



カーテンの開閉



ショートの送迎時

結果 :役割(カーテン閉め、食事前の食卓準備、トマトの水やりなど)を習慣づけることで、落ち着いて過ごせる時間が増えた
HDS-R11点 DBD:12点 Zarit:13点

課題 :ショート利用時、精神的に落ち着いて過ごされることも多くなったが、他利用者の徘徊や不穏に影響され、混乱されることがある。本人の周辺環境にスタッフ全員で意識する必要がある。